



「ひざし」の中から優秀作品を集めた「ひざしの子ら」  
(成田市立図書館)

成田  
歴史  
玉手箱

●57回●

歴史と伝統文化の  
まち・成田。市内に  
は、歴史ある文化財  
が多数あります。

地域作文集『ひざし』

子どもたちが綴った印旛の半世紀

「子どもたちの生活や体験が素朴で輝きをもった言葉で綴られた作品、それに出合い・発見したとき本当に喜びを感じます」と語るのは、印旛地域の文集「ひざし」の編集委員で、印旛地区教育研究会国語研究部長をされた本城小学校長・中村智裕さん。同会が発行する「ひざし」は昭和23年11月に創刊、戦後教育の出発とともに生まれました。以来58年間の長期にわたって発行された地域文集は、全国にも例がないといわれています。

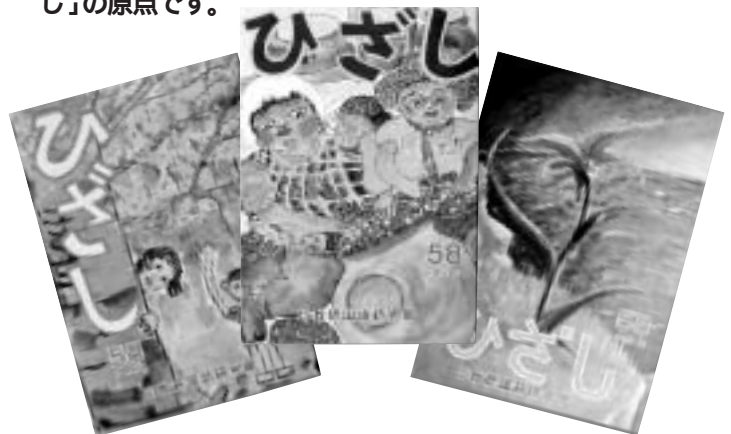
印旛国語研究部の歴史は古く、昭和初期に遡ります。戦前は水野葉舟・柳田國男・金田一京助・行方沼東氏などの文人・学者との交流もあり、特に三里塚に住む水野氏は「綴り方教室」や「印旛郡児童作品集」の選者として、印旛の教育界の指導的役割を果たしました。しかし、戦争が始まり活動は一時中断せざるを得ませんでした。

戦後、子どもたちを戦争の痛手から一日も早く立ち直らせることが教育現場の課題で、“子どもの心をつかむには言葉を語る国語が一番”と倉次重一氏が発起人となり、昭和21年に印旛郡国語同好会(現在の印旛地区教育研究会国語研究部の前身)が誕生したのです。会の中心となった仕事は国語教育の実践活動と文集づくり。国語を通して子どもを育てることを目指し、作文教育を具体的な活動の柱として地域文集を作ることに、「ひざし」の誕生です。文集の名前は、郡内の先生から募ったもので、「太陽のひざしを受けてすくすく育つ子どもを願う」という意味が



込められています。昭和22年、同好会に入った蛭田光城氏(南羽鳥)は、「当時は日曜も休んだことはなかった。作品を持ち寄り扇屋旅館(幸町)での編集会議は夜更けまでよく討論したことを覚えています」と懐かしそうに振り返ります。

「ひざし」とその優秀作品を選んで出した文集「ひざしの子ら」は、新聞・ラジオでも紹介され作文教育の好資料として全国国語教師の話題に。また、作品が教科書に掲載されるなど教育界でも高い評価を得ています。作品は現在、小学生が作文と詩、中学生は俳句や短歌もあり、小学校低学年・高学年・中学生の3分冊で出版されています。表紙や挿絵も子どもたちが描いたもの。半世紀という月日は、児童や生徒の生活・家庭・社会環境を大きく変えました。作品一つひとつがその時々を反映し、郷土の移り変わりや心の動きなどが綴られています。変わらないことは、自然で生き生きとした子どもたちの体験や実感が素直に書かれていることです。それが「ひざし」の原点です。



創刊号など古い「ひざし」は数冊ごとに製本され大切に所蔵されている(成田市立図書館)

最新号「ひざし」第58号(本城小学校・成田中学校)

編集後記

本号の表紙は成田に初登場の「伊能歌舞伎」です。記録によると、千葉県内で確認されている農村歌舞伎の上演地は約30カ所、その内の6カ所が大栄地区に集中。ほとんどが廃止されていて県内では約10年前に全廃。そんな中、平成11

年に「伊能歌舞伎」が34年ぶりに復活したのも、この上演地の数をみるとうなずけます。復活にも増して難しいのが存続。これからは「成田市の誇る郷土芸能」として、新市民みんなで盛り上げていきましょう。